

# 大学における人間疎外について（そのⅠ）

——学生の調査報告を中心に——

岸 本 弘

## 目 次

1. はじめに.....	1
2. 「人間疎外」についての学生の調査報告 .....	2
3. 問題点の考察.....	8
4. 集団分類の学説.....	13
(イ) 米英の分類.....	13
(ロ) ドイツの分類.....	16
(ハ) その他の分類.....	17
(ニ) コントとデュルケーム.....	18
(ホ) 諸分類の相関性.....	21
5. 2つの型の集団.....	23
(イ) 合理的集団型形成の阻害.....	24
(ロ) 大衆社会の集団の特質.....	26
(ハ) フロムの警告.....	29

# 大学における人間疎外について（その I）

——学生の調査報告を中心に——

岸 本 弘

## 1. はじめに

長い空白の後に開かれた集中講義と、それにもましてあわただしく過ぎ去っていった学年末試験はともかく、あれはたて空気のなかで形だけは平常通りに再開された新学期年度に際して、これからの授業をどうやっていくかは教師にとって、決して些細な問題ではなかった。学生と私との間の結びつきには、単に単位を与える者とそれを与えられる者との関係のみしか残されていなかった。それ以外の人間らしい交流の芽はほとんどつみとられ、あとかたもなく消え去っているかのようであった。いってみれば、学生たちが好んで使う「人間疎外」の関係が、私たちの間にはうちたてられていたのである。

私は、ここでは主として講義再開の冒頭で、問題となった「評価」の問題についての、学生との討議及びそれにもとづく些細な研究討議について、述べるつもりで筆をとった。どの教室（青年心理・教育心理）でも例外なく、教師の「評価」については不信感が表明されたからである。

再開冒頭の教室では、

「あなたは何のために評価するのか？」また「誰のために？」そしてまた「何故に？」とどまるところのないように疑問は、つぎからつぎへと発展させられていくのであった。——：「教育は評価することによって、教育ではなくなっていくのではないか？」つまり「管理とかとりしまりとか——少なくとも教育を旧時代につなぎとめておく、非教育的（抑圧的）なものにしていくのではないか？」「もし大学が自由であり、社会の真のあり方を追求していく、学問本来の目的を追求する目的社会であるならば、評価は教師と学生とが少なくとも五ふ五ふの立場、いや自主評価、自己評価こそが主体とされるべきではないか？」「評価こそは、学問の真に自由な追求にストップをかける、大学の理念にあわない作業ではなかったか？」等々。

「評価」の問題こそは、教師と学生（被教育者）の関係つまり教育関係を複雑にしてきた問題であったから、当然のことのようになざまな問題点が提起されてきた。学園紛争の過程で一般的ともなった、教師と学生間の不信感は当然日常の講義自体への不信の表明であろうし、また教師がひとりひとりの学生にマークする評点、評価の問題への不信の表明であった。

再開冒頭からはじまった。この「評価」の問題を、私はこの論述の主要な問題としていきたいと思っている。しかしその前に、その前提として、その不信感の背景となっている、大学における人間疎外の問題について、学生間及び学生との間で行われた些細な討議を問題にしてみようと思う。

## 2. 「人間疎外」についての学生の調査報告

私は、担当している、本校の昼・夜・和泉・生田の「青年心理学」の時間に、講義と並行して、学生たちを幾つかのグループに分け、学生たち自らを対象に調査させてみることにした。調査法（質問紙法）は、青年心理学の有力な研究方法であり、学生自身正常なコースを通過して来れば青年期の終りごろに位置しているはずだったからである。

学生のグループは合計 75 にわたったが、その学生が選んだ 75 調査項目の中から、少しでも人間疎外に関係あるものを選び出すならば、ほぼその数は 3 分の 1 に達したであろう。ここでは主として生田の学生（工学部・農学部）の 2 年生が主体）が、この問題について調査し報告したものを中心にのべてみたい。調査、発表の中心になったのはつぎの 6 人の学生である。

出 原 祥二郎（工学部 2 年）

大 島 邦 雄（        ”        ）

大 西 正 和（        ”        ）

亀 島 純 夫（        ”        ）

喜多村 成 晴（        ”        ）

本 田 敏 和（農学部 2 年）

（注）講義の時間を 1 時間さいてやる代表発表であるから、はじめは生田の学生の 21 の調査項目（生田でグルーピングした学生グループの数）を分類して、最も数の多い関連項目を選びだして発表させることにし、分類してみた。それによると、

- ① 青年期の問題（恋愛・不安・非行・自殺等）…… 6.
- ② 人間疎外（生きがい・親友・人間関係等）…… 6.
- ③ 学園問題（学園紛争・教師・マスプロ・講義等）…… 4.
- ④ パーソナリティ・性格形成等…… 2.
- ⑤ 喫煙…… 2.
- ⑥ アンケートを受ける者の心理…… 1.

上記のグルーピングには多少問題があり、粗雑にすぎる点があったと思うが、いちおうこの結果から「大学教育と人間疎外」程度のテーマで特に関連のある 5 グループを選んで、パネルディスカッション形式で発表させることにした。ところが安保のロック・アウトとぶつかって学生間の連絡討議がうまくゆかなくなった。やむをえずこの 5 グループ間の話しあいによって、上記のグループが単独で「人間疎外」の問題について発表することになったものである。

題していわく、「人間疎外の感覚は、現代青年（この場合明大生）の間に実在するか？」

調査目的としては「われわれ現代人は、マスコミによって人間疎外が実在するかのように信じこまされている。」が、「果たしていわれているところの人間疎外の感覚が現代青年の間に実在するのであるか？」、「もし実在するとすればその実態は？」というのであった。そして「私達が教員になった時、現代青年の間に底流するそのような人間疎外の感覚にどのように対処すべきか」を考察するためにこの調査は行なわれたのである。

調査方法としては、もし人間疎外の感覚がその人に底流としてあれば、当然それに対してそのような答が返ってくるはずであると仮定しうる質問事項を幾つか設定し、被調査者の解答を総合的に判断することによって、彼らに疎外感が実在するかどうかを判定しようとする方法がとられた。そ

## 大学における人間疎外について（そのⅠ）

のために選ばれた質問事項とその解答数をまず参考のためにあげれば、つぎのようになっている。

1. 大学生活に何を期待しますか。
  - イ) クラブ活動（活動自体）……………11
  - ロ) 授 業……………25
  - ハ) 学 校 行 事…………… 4
  - ニ) 人間的触れあい……………72
  - ホ) その他（具体的に）……………13
2. クラブ活動について何を期待しますか。
  - イ) 好きなことができる……………13
  - ロ) おたがいにかざらないで話しあい、人間関係を深めたい……………25
  - ハ) 先輩の助言……………42
  - ニ) そ の 他……………20
3. マスプロ教育に対してどう感じますか。
  - イ) 断固粉碎すべきである……………15
  - ロ) 改善の努力が必要である……………73
  - ハ) 現状ではやむをえない……………13
  - ニ) よいことである…………… 1
  - ホ) そ の 他…………… 5
4. 中学、高校の先生といまも交渉がありますか。
  - イ) 家を訪問する……………34
  - ロ) 手紙の交換をする…………… 7
  - ハ) 年賀状、暑中見舞程度……………36
  - ニ) 全 然 な い……………24
  - ホ) そ の 他…………… 7
5. 受験勉強で友人の存在を意識したことがありますか。
  - イ) あ る……………70
  - ロ) な い……………29
  - ハ) どちらでもない…………… 9
6. 5. において イ) と答えた人は、その友人が不合格と知った時、どんな気持がしたか。
  - イ) ホットした……………15
  - ロ) 残念に思った……………26
  - ハ) 口をきけなくなった…………… 4
  - ニ) 何も感じなかった…………… 7
  - ホ) そ の 他……………10
7. 教師、親、友人と意見の上で相違を生じた時、どうしましたか。

イ) あくまでも自分の意見がまちがっていないと信じ、おしとおした

ロ) その人と話しあった

ハ) その人の考えに同調した

ニ) そ の 他

教 師	イ..... 9	親	イ.....17	友 人	イ.....11
	ロ.....20		ロ.....30		ロ.....38
	ハ.....15		ハ..... 7		ハ..... 6
	ニ..... 3		ニ..... 3		ニ..... 2

8. 人と違和感を感じた事がありますか (たとえば、人のしている事をばからしく感じたことがありますか。)

イ) あ る.....93

ロ) な い..... 4

ハ) わからない..... 2

ニ) そ の 他..... 0

9. あなたは孤独感を感じたことがありますか。

イ) あ る.....90

ロ) な い..... 3

ハ) どちらでもない..... 3

ニ) そ の 他..... 0

10. 9.において イ)と答えた人はどんな時に感じましたか。

イ) ひとりである時.....44

ロ) 大衆のなかにいる時.....46

ハ) 授業を開いていて..... 5

ニ) 友人といっしょの時.....17

ホ) そ の 他.....12

11. 9.において イ)と答えた人の解決方法はどんなでしたか。

イ) 旅に出た..... 9

ロ) 友人に会いに行った.....15

ハ) 飲みに行った..... 9

ニ) 耐 え た.....13

ホ) ただなんとなく解決した.....26

ヘ) そ の 他.....10

12. あなたは親友がいますか。

イ) は い.....81

ロ) い い え.....16

大学における人間疎外について（そのⅠ）

13. はいと答えた人だけお答え下さい。あなたの親友はどんな人ですか。
- イ) 遊 び 友 達.....12
  - ロ) 気軽に金の貸し借りができる人.....10
  - ハ) なんでも話しあえる人.....60
  - ニ) 自分の悩みをうちあけられる人.....28
  - ホ) 代返したり、ノートを貸してくれる人..... 7
  - ヘ) そ の 他..... 6
14. あなたを今必要としている人がいますか。
- イ) は い.....11
  - ロ) い い え.....51
  - ハ) わからない.....15
15. あなたが必要とする人は？
- イ) 恋 人.....34
  - ロ) 親 友.....36
  - ハ) 先輩・後輩.....11
  - ニ) 代返してくれる人..... 4
  - ホ) そ の 他.....18
16. あなたはひとり旅をしたことがありますか。
- イ) は い.....49
  - ロ) い い え.....52
17. はいと答えた人にお開きします。ひとり旅の目的は何ですか。
- イ) 社会からの逃避..... 6
  - ロ) 景色が見たいから..... 5
  - ハ) ストレス解消..... 6
  - ニ) 自己の再認識.....16
  - ホ) 素朴な気持ちを求めて.....18
  - ヘ) ひまつぶし..... 7
  - ト) そ の 他.....11
18. いいえと答えた人にお聞きします。ひとり旅の目的は何だと思いますか。
- イ) 社会からの逃避..... 3
  - ロ) 景色が見たいから..... 2
  - ハ) ストレス解消..... 5
  - ニ) 自己の再認.....25
  - ホ) 素朴な気持ちを求めて.....24
  - ハ) ひまつぶし..... 1

ト) そ の 他…………… 6

以上である。

つぎに彼らが考えている疎外観についてみてみよう。彼らの報告及びそれについての討論の後に、彼らがまとめた疎外観をそのまま再現すると、

他人の立場を考えないどころか、他人の存在すら意識してものごとを行わないのが、人間疎外の本質である。つまり周囲の人を人間として扱わず、あたかも周囲の物体と同じであるかのように扱う様相の表現が、人間疎外である。

ということになると、田舎には疎外はないのかどうか。(討論の過程で①人間疎外は資本主義社会の都会の産物……つまり田舎には資本主義的人間関係は浸透しにくい、浸透するにしても遅いであろう。いずれにしても典型的な形では資本主義は浸透しないだろう……、②ともあれ田舎は人口が少ない、疎外の第1条件には人口が多い(過密)ということがあげられるだろう。それならば田舎の人口は資本主義の進展によってかえって少なくなる(いわゆる過疎)。ということになると、田舎には人間疎外がない、あるいは少ない。とすれば田舎のような関係、環境づくりが疎外脱出の条件になるのか、という問題が提起されたので、この問題が当然大きな疑問となった。そして現代の若者は都会へ都会へと都会に憧れて田舎から脱出してくるのに、都会で疎外された若者たちは憧れてきた都会に、脱出にきたはずの田舎の人間関係を移し植えることによってしか救われる他はないのか、という問題が提起された)

これについては、「田舎ではただやたらにおせっかいをやいたり、他人の一部始終を知り、とやかくいうことが、他人の立場を無視し、他人に非常に迷惑をかけていることが明白である。秘密を一切許さないというような関係は人間の自由を疎外している。故に田舎に疎外がないということにならないし、一方都会における他人の存在すら考えない自分だけの生活が(つまり自由の過剰)人間疎外の関係であることも明白である。」とはなはだ當を得た解答。つまり田舎には関係の過密があり、都会には関係の過疎がある。それが逆の側から人間疎外の原因をつくっている。というのである。

ということになると、中間の人間関係こそが、疎外のない関係ということになるのか。おそらくそうであろう。ただ歴史がそれを許すか。またはそれと関連して、田舎の人間関係は、人間疎外とはちがった、次元のちがう立場でとらえられるべきであり、したがって定義されねばならないのではないか、等々。

次にこらで解答集計の方に少し眼をやってみよう。まず学生が問題にしたのは、親友のある人。それが80%以上もいるのに、人間疎外観が実在するのはおかしいという意見については、――

たとえばある意見では、これらの解答では親友と友人とは同じものであって、親友をただの友人と同視している人が多く含まれているにちがいない。したがって親友をまず定義することが必要。親友を定義することによって、人間疎外の関係はおのずから解消されるという意見。

それとはまたちがって、現代の友人は非親友であるところに特質がある。だから、親友、友人を持つ人が80%以上いても、彼らに人間疎外感があっても不思議はない。また小さなフラクション、



たとえば恋人とか麻雀友達とかの間には確かに信頼関係がみられる。しかしいったんその小さな枠をはずれると、たとえばクラスにおいても、講義のマスプロ教室においても、電車のなかでも赤の他人である。われわれは親密な小さな人間関係と全くそれとは対極的な全くつながりのない多くの人間関係のなかに住んでいるのであって、大海における孤島の関係が人間疎外感の生みの親であり、育ての親である。

都会人は互いに信頼関係といわず、一片のつながりもないのがあたりまえと考えている。すなわちカバンを忘れれば、そのまま残っていると考える人はいない。生き馬の目を抜くところであり、他人を見たら泥棒と思えが、人間関係の倫理なのである。だから道路のまんなかで子どもが殺されても通行人は知らん顔をしていいのであり、電車のなかで暴力事件があっても知らん顔なのである。つまりわれわれの社会はすべてからの自由、悪への自由（ある限界はある）すらをも保障することを理想とする社会に住んでいる。

これらのことはある意味ではおとなの「他人の雑事を自分に持ちこまない」という生活の知恵のあらわれかも知れないが、その代償としてわれわれは毎日多くの人にかこまれながら内実は大海の孤島に住んでいるのと同じようにさびしく暮らしている。その当然の帰結としてアパートで若いサラリーマンや老婆がひとりで自殺、あるいは老衰死しても、隣近所の人が3、4月も気がつかないというような事態になるのである。こうした人間疎外の関係が人間らしい関係といえないことは明白なことで、多くの青年たちの間にはそうした疎外感覚が底流し、不満に思っているのである。

彼らは一千万都市といわれる人ごみの中ですら孤独を感じ、だからこそマスプロ教育のなかで75%が「改善努力が必要である」と答えている。そして残りのうち15%以上もの人は「現状ではやむをえない」と答えている。これらの人は、アンケートの印象として疎外されていると同時に、前述の75%も含めて、すでにあきらめ、口先きでは改善すべきだといいいながらうちにこもろうとしているようにみうけられる。ということであれば孤独を感じた時の解決方法としてもただ何となく解決した、と答えた人が30%もいるのは驚くにはあたらないであろう。これらの人々は終局において解決しえていないと同時に、そのことに対して積極的に働きかけていないと思われる点が多いと分析せざるをえない。人は現在の立場をより優位に、よりよい状態にしようと望み、行動するはずである。ところがそれができないということ、消極的にしか行動できないということはなぜか。自分の立場を他人の立場と比較する尺度がないから、または比較すべき真の対象がない、つまり疎外されているが故であろう。

疎外は既にこういう段階まできている。疎外は現代のどうしようもない大勢である。だからこそ、誰も、教師も学生もどうもしなかったのであろう。したがって大海にさまよう小舟のような自分のようなものが、これについて考えることはだいそれたことで、ただ時の経つのを待って解決する以外にはないのである。

また、7の設問に対する解答のなかに、「議論する前に避ける」という解答があったのなどは、これこそ人間関係、信頼関係の樹立への努力のむなしさ……解決しえない人間疎外の袋小路にある現代人を象徴しているものといえよう。

ところでこうした現代青年に接していくものとしての、教員の留意点としてあげられたものを整理すれば

① あくまでも教員としてではなく、生徒の友人として愛情をもって、その生徒に接していくことにより、その解決、解消に努める。

② 原因が内的なものである以上、これについてはどうしようもない。(これについては討議は全くされていない)。

③ 原因が外的なものである以上、社会を変えていかない以上どうしようもない。だから社会改変の方向に働きかける、以外に有効な行動はありえない。

④ 疎外された人間(教員)が、政外されつつある人間(生徒)をどのようにしていくことができるかが、③との関連において常に考えられていなければならない。

そしてまた教師ではない大学生の現在の努力目標としては、教員になろうとするものも、またならないものもともに、サークルなり、グループなりを組織し、利用し、そこで、互いに考えあい、話しあっていくことが必要であり、1つの運動として展開していくことが望まれる、というのであった。

### 3. 問題点の考察

学生がこのようにして提起してきた、「現代青年における人間疎外」の問題は、まさにマスプロ大学における疎外の問題であり、前述したように、他ならぬ私と学生間の疎外の問題でもあった。かぎられた時間内のかぎられた討議ではあったが、幾つかの問題が提起されているように私には思われた。そのなかから特に印象に残ったものを、2, 3ひろいあげて素描してみよう。

#### ① マスプロ大学のサークル(クラブ)活動。

学生の間には意識するしないとは別に、すなわちばくぜんとしたものであれ、とにかくつぎのような対照観があるように思われる。

都会の人間関係(対)田舎の人間関係 $\equiv$ マスプロ大学における一般的な人間関係(対)サークル(クラブ)活動における人間関係 $\equiv$ 悪(対)善。

このように明確に表現するならば、おそらくは、学生の多くは反発することだろう。反発の多くは都会 $\equiv$ マスプロ大学、田舎 $\equiv$ サークルの等式にあるのであろう。その1つはマスプロ $\equiv$ 悪、サークル $\equiv$ 善、はよいとしても、都会 $\equiv$ 悪、田舎 $\equiv$ 善には多少疑義があるからである。すなわち田舎にも前述のように人間疎外、あるいはそれに類する人間関係があることを知っているからである。ということであれば、前述の等式のような観念が、ばくぜんと学生の間にあるらしいことを示唆するだけにとどめておくことにしよう。われわれの現在の考察にとっては、

マスプロ大学の一般的な人間関係(対)サークル(クラブ)の人間関係 $\equiv$ 悪(対)善の観念が学生間にばくぜんとであれ、流布していることを確認すればそれだけで今のところはじゅうぶんだと思われるからである。

後者の等式については、確信をもっていうことができる。学生間には、信仰にも似たこの等式観

念が成立している、と。これは現代の学生のはっきりとした特質の1つに数えてよいであろう。戦前、戦中の学生にも、サークル（クラブ）活動から、さらには寮生活への強い信仰があったことは事実である。しかしエリートのための人間関係形成の意味を持ったそれと、今日のそれとを同列に置くことはできない（これについては後述するつもり）。いずれにしても、マスプロへの反発と、サークルへの信仰は、ばくぜんとしたものであれ、誰にもあるように思われた。

その理由はどこからきているか。もちろんまだこれに正確な解答をするだけのはっきりしたデータを持ちあわせているわけではないが、学生たちとの日常の会話や答案などに書かれているものから判断して、サークル活動やクラブ活動に対するかたくなまでの期待は、中学や高校でこれへの活動の芽が、心なき受験戦争のためにつみとられ、たわめられねばならなかったことに起因しているのではないかと思う。たわめられ抑圧された根強い早期の欲望が、しつようにその目的を果そうといつまでもそのはけ口を求めてやまぬこと、抑圧されることで欲求がますます強くなる様相は、フロイトやニールによって見事に描かれているところである。小学校や中学校、さらには高校時代のクラブ活動やサークル活動に対する欲求が、個人差はあれ、しつようなまでに強く高いことは、すべての人が経験しているところであろう。私もこれには苦しんだのであり、私の場合には野球やサッカーであり、サッカーでは全国大会まで行く幸運にはめぐまれたが、しかししのびよる上級学校への受験準備の有形無形の圧迫により、とことんまでこの欲求を充足させることのできなかったことが、その後長くくやまれた経験がある。しかも高校（旧制）、大学段階にすすむにつれてこの欲求が、学問や交友関係などの欲求と屈折しからみあって、全くあぶはちとらずの中途半端に終り、ほろにがい青春の思い出となっていまも残っている。ミードの主張に待つまでもなく、人生の花といわれる思春期、青春が、文明社会では、おとなたちの無思慮から、不幸な苦悩に満ちた季節となっていることを疑う人はいないであろう。日本では特に子どもの生活がその自然の欲求をたわめられる方向に今なおむけられていること、子どもの生活がたえず未来の何かのための準備としてのみとらえられていることは、ルソーを思いだすまでもなく、少なくとも心理学の学徒であるならば、肯定せざるをえないところであろう。

おとなたちも、かつてはそれに悩んだはずである。だからそれは親たちによって解決されなければならない、親の主要な課題であるはずである。しかし「忘れる」ということが、発達の一側面である——忘れなければ発達しない——ということ。自分たちが経験した悪は子どもたちだけにはくりかえさせたくないという親のことは——実際よく耳にしすぎる親のことはであるが——実際には、親は似た親にしかならない——親らしくない親はいつの世にもたえないが、親らしくない親に育てられた子が存在するかぎりつづくだらう——という事実によって常にうらぎられているということ。これは解決の方策がむしろ誰によってになわれなければならないかの問題を考えるいとぐちを用意しているといえるかもしれない。

閑話休題——いずれにしても現代学生間のサークル活動に対する期待は根強く、その実現のための要求は想像以上に高いことは、認めないわけにはいかない。こうしたサークル活動やクラブ活動における人間関係や人間的ふれあいに対する人間的な欲求が抑圧され、そらされてきたことが、

人間的ふれあいとその設定とに異常なまでの期待をよせ、それにすべてを換算することによって解決することができるかのような幻想をうましめたといえ、ためにする議論の徒とよばれるであろうか。確かに学生の幻想にも似た期待を錯覚とまでよべば、いい過ぎになるであろう。なぜならば、サークルやクラブにおける人間関係は、望ましい人間関係への芽をたくさん持っていることはまちがいないからである。またサークル活動の対極ともいえるマスプロ教育自体を擁護するかのよう論もあたらぬであろう。それが歴史の必然であるにしても、それ自体は解決されなければならない多くの問題を含んだ歴史的必然として登場してきているのであるから。

彼らはこうしてマスプロ教育がかもしだしているそらぞらしい人間関係、むしろ近代学校としては日常的なあり方をひどくにくみ、サークル的活動、ゼミナールの人間関係への強い欲求をもって大学へやってくるのである。学校教育の最終段階である大学にだけは受験戦争にわざわざいされない、本当の教育、学問研究（人間的ふれあい）があるにちがいないと思ってくるのである。がまんがまんしてきた欲求の解放とその充足を学生たちは大学に求めてやってくるのである。

しかし大学紛争を経た昨今としては、これは甘い。いい過ぎであろう。彼らの多くはほとんど例外のないように大学に多くを期待していない。大学の授業や講義や教授には、それほど期待していないと答えるからである。

参考のために学生の調査「講義と教師に対するアンケート」（石渡千司（農・3）石黒啓一郎（工・2）雪島奏（工・2）川田正雄（農・2）田中寛（農・2）今関宗博（農・2））の結果をとりあげてみよう。

1. 君にとって教師はどんな存在か。

- イ) とるにたらぬ存在である……………24%
- ロ) 友人のごとき身近かな存在である…………… 0%
- ハ) 経験豊かな、知識者、学者である……………60%
- ニ) そ の 他……………16%

2. 君のクラスの担任または受講している教授に君の名前を覚えている教授がいますか。

- イ) は い……………29%
- ロ) い い え……………59%
- ハ) わからない……………12%

3. 講義を受ける時の態度は

- イ) 予習し、講義に集中している……………11%
- ロ) 出席はするが、講義外のことを考えているときの方が多い……………55%
- ハ) 代返（または代筆）を友人に頼み出席しない…………… 7%
- ニ) そ の 他……………27%

4. なぜ君は講義をうけるのか（なぜ大学に入ったのか）

- イ) 単位をとるため……………16%
- ロ) 授養を高めるため（知識欲を満たすため）……………54%

ハ) なんとなく、惰性で……………15%

ニ) そ の 他……………15%

以上であるが、この調査は学生自身が認めているように「調査班のメンバーが農工両学部で構成され、十分な話しあいのチャンスがつかめず」「総括を求めるには、あまりに推定によらねばならない点多すぎ」る、つまり「まとめるにはまとめるにたる質問とその reaction が必要な」ことはいなめない。むしろ一つの興味はその設問項目とそのことばにあるだろう。しかしそれはそれとして、この調査結果をもとにして学生諸君がまとめている文章の方に、むしろ興味があるともいえるので、それをそのままつぎに引用しよう。

「まず第1に教師側と学生側とを結ぶ絆がない（皆無に近い）ため、本来絆を成立さすべき第1の要素である講義の価値判断が、性質上あるまじき方向に向いている。原因としてはマスプロ教育の弊害（大学教育の大衆化）があげられるが、この表面的現象そのものより、今日に至った過程というものが、実は重大な意味を含んでいるのである。すなわち戦後の資本主義過当競争時代の中における人間は、もはや金銭を媒介として生かされ、また生きる他はない。その傾向は、日本の国民性というか、歴史的処生訓である『学歴尊重主義』、『立身出世主義』によってますます拍車をかけられて、大学を頂点とする一連の教育に対する現代の風潮が出てきた。

そこからは教育を受けることに対するはっきりとした目的意識も生れないし、教育する側の目的意識も生まれえない。教師に対して人間的魅力を覚えないという解答もうなづけるのである。昔は教師のなかにはいわゆる『人間教師』がいた、ともの本にあるが、それは教師に権威があり、『俺についてこい』式（よい意味での）人間教育をになっていたということだろう。よい意味の権威というものは今こそ発揮されるべきではなかろうか。それがなければ、『その場のがれの教育屋』、『生徒に気がねしている』、『あきらめ……』、『専門馬鹿』……などなど、と悪評を受けてもしようがない。つまりこの時におよんで一番必要なことは『社会が、社会がという前に、矛盾に気がついた時、各々が（大学においては教師と学生が）打開策を打ちだす、勇気がありやいなや』ということではないだろうか。

これは現代の青年の価値というものが、ばらばらであるという以前に、価値そのものがないということの裏返しである。われわれが現在に生きているということは明白な事実なのであるから、マスプロ教育のなかで、打開策をあらゆる意味でそれを戦わせ、全体としての進展をとげさせるという意志を教育人といわず人間みんなが勇気をもって確認し、推進していくことが必要であると考えらる。以上。」

ここにはすでにマスプロ大学を歴史の必然として認めたうえで、その打開策を戦わしていくべきであるとの提案がみられる。しかし新しい権威の確立が必要であることはまちがいないにしても、それが過去への追想——『俺についてこい』式（よい意味のとことわってはいらるが）教育の復活によって打開されるかどうかは、大きな疑問点として残るのではないだろうか。

マスプロ大学や現代の都会社会に人間疎外とよばれる、そらぞらしい、人間らしからぬ人間関係が一般化していることを疑う人はいないだろう。そしてその人間関係の人間らしい関係への改造が、

多くの大学人、都会人の願いであることも疑う人はいないだろう。しかしそれが田舎のようないわば過密、過剰な人間関係を大学や都会に持ちこむこと、つまり過去への回想によって打開されるかどうかは、大きな疑問といわねばならない。このことは田舎の人間関係をうとましく思い、都会の「隣の人は何する人ぞ」式の人間関係に憧れて都会へ出てきた人には、特にそうであろう。

しかし都会の生活しか知らない学生にとっては、必ずしもこの関係はいうほどに明々白々のものではないだろう。彼らがその打開策のアウトラインを、たまさか訪づれるが故に珍らしくうつる、両親の故郷における、都会とは対極的な人間関係のなかに見出そうとしたとしても、必ずしも不思議なことではないかもしれない。私と同年輩の従兄弟である都会育ちの医学徒がインターン時代に、「こんなそぞろしい人間関係の支配している都会に住みたいという君の気が知れない。君とは逆にできれば祖父の田舎に帰って開業したいというのが私の念願だ。そこでは誰々がどこそこの誰の息子であり、誰の従兄弟で誰その孫にあたるかは、すべてたちどころに知られる程人間関係がはっきりしている。そのようなところですからすべてを知りつくしたうえで治療をするのが本当の医術だ。いわば人間の治療をしたいというのが私の将来の生活設計だ」と田舎出の私に述懐するのをたびたび聞いたことがある。彼は不幸にして私の田舎で開業するという、その本望を達しなかったが、実際に何度か田舎に行って開業のための可能性を探った後に、やっと資金の出所をさぐりあてえず、彼はあきらめたのであった。ついでに言えば、その資金調達の可能性を探る過程（彼にとっては、それはあるねらいを定めた結婚相手（候補者は複数）を射落すことを意味していたのであるが）で、彼はさまざまなよそ者来入への田舎人のつめたい抵抗にあって、彼が考えていたほど田舎の人間関係が純朴で、ユートピア的に成立していないことをいやというほど知らされた。こういう例は枚挙にいとまがないだろう。その原因は田舎人は都会に憧れ、都会人は田舎に憧れるという、「他人の城はよくみえる」というような単純なところからもきているだろう。そしてこれが前述の私の従兄弟個人の生活設計の段階に止っているかぎりには、罪のない昭和元禄の閑話として聞き流されてよいだろう。しかしこれが善悪、人間関係のあり方はいずれか、というような問題とかかわって提出されてくるならば、問題の次元は変わってこよう。ニールのいうように善悪の判断が加わってくると、その結果の行方は重大で考察しないわけにはいなくなるからである。というよりもそのようなばくぜんとした不満と期待の方向が利用され、見えない手で操作される危険を指摘する方が、より現実的なことであるかもしれない。

たまさか休暇に田舎に帰る学生の述懐は、ある意味では示唆的であるといえる。「私は大学にいる時には保守的な学生である。なぜならば現在の学園紛争のやり方は正当なあり方とは思えないからである。ところが田舎に帰ると、きわめて進歩的な立場にたって発言し、自治会的立場にたってこれを弁護している自分に気がついて驚く。私は現在の学生生活に疑問をもっている。しかし保守ではいけないとも思っている。」と。

閑話休題——この問題を考えていくために参考とされた、集団分類の学説についてみておこう。

#### 4. 集団についての学説

人間疎外の背景には、むろん哲学、つまり人間観、世界観があろう。そのような人間観、世界観によって人間関係が規定され、それによって実際に生きている人間は疎外感を意識する。そのような人間観、世界観は、むろんそこに成立している生活様式、文化の産物である。文化や生活様式、行動様式をのせているものは集団である。個人は集団によって生き、集団を通して生きる他はない。集団から離れて存在することはできないのが人間の特質である。

個人は集団のなかに生れこみ、その瞬間から、行動の仕方、生き方をその集団によって学ぶのであり、その学習を通して自己の個性を培う以外にはないのである。このように人間に先行し、その意識を決定するものは、集団であるともいえるが、個人が出入りする集団は決して1つではなく、さまざまな特質をそなえている集団が個人のまわりには成立している。だからこそ前述の田舎の学生は、自己の行動様式の分裂を経験し、その分裂を生じさせる田舎と都会の集団生活の善悪の判断にまよっていたのである。というより、彼のまわりにさまざまな特質を持つ——大きくわければ田舎と都会の異なる集団が成立していることが、彼に集団について考えさせ、疎外観をも意識させたのである。

われわれの生きている社会には、さまざまな集団が成立している。そしてさまざまな機能を果たことによって、個人の生活に影響を及ぼし、これを規制している。われわれはいずれにしても何らかの集団に属して生活する以外にはなく、これによって幸福を実現していく他はない。だからこそその集団を意識し、場合によってはこれを変革しえないものかと考えるばかりではなく、意識的に新しい集団を作りあげたりとする。

われわれにとって幸福実現の集団はどのようなものであり、不幸生産の集団の特質は何であろうか。あるいは、人間疎外関係の原因となっている集団とはどのようなものであろうか。

こうしてわれわれの周囲に成立している集団について研究していくことが、当面の課題となるが、われわれの周囲にはどのような種類、特質の集団が成立しているのであろうか。まず集団をその特質によって分類してみることが得策といえよう。さいわいわれわれの周囲には、さまざまの見地、標準から分類された集団分類の遺産がある。つぎにその主なものをあげてみよう。

##### （Ⅰ）英米の集団分類

###### （1）第1次集団 (primary group)

英国のクーリー (C. H. Couley) が創りだした概念で、非常にポピュラーなもので、つぎにのべる同じほどポピュラーなドイツのテンニース (F. Tönnies) のゲマインシャフトの概念と相通ずるものが多い。クーリーは、その特質として面と面とつきあわせた親密な接触 (face-to-face association) と共同 (co-operation) による一体感、いわゆるわれわれ感情 (we-feeling) の2つによって特徴づけられる集団とした。その後アメリカのデイヴィス (K. Davis) は以上のような性質は多かれ少なかれどの集団にもある。したがって適切な特質とはいいがたい。第1次集団の特質としてはつぎのものがあげられるべきである、とした。

- ① メンバーが身体的、面対面的の接触を持つ、つまり密着した人間関係にあること、
- ② 集団が比較的少数のメンバーによって構成されている。つまり小集団であること、
- ③ メンバーの結合が持続的であること、

そしてこの集団に特有な第1次的人間関係は、次の5点で規定される、とした。

- ① 目的が同一であり、共有されること、
- ② 相互の関係がそれ自身目的であること、
- ③ 相互の関係が人格的であること、
- ④ 相互の関係が多面的であり、一体感からなること、
- ⑤ 相互の関係が自発的であること、

いずれにしても第1次集団は、クーリーが主張したように、メンバーの態度や性格やパーソナリティの形成に、主要な影響力（1次的影響力）を持つ、ということによって1次的といわれうるのである。愛着的非功利的な動機から、メンバーの間に直接的で面接的な親密な結合および協力関係が成立している集団である。その結果、個人は1つのわかちがたい共通の全体の中にとりこまれ、その結果自己主張の場が抑えられ、非合理的な感情を基礎とするわれわれ感情が生れてくる。こうしていれば個人の生活はなく、集団での共同生活やその目的が、個人の自我そのものとなるような集団である。その典型としては、第2次集団の出現と機能との対比によって、小規模で機能未分化な家族、子どもの遊戯集団、近隣集団などがあげられる。そしてそれぞれ愛、自己犠牲、奉仕、市民精神などが形成される苗床とされている。

個人的自我の確立過程が近代化の特質であり、ルネッサンス以後の歴史の方向であるとすれば、個人的自我の確立を抑え、集団的の自我への埋没を特質とする第1次集団は、社会進化に対応して考えられる場合、後述するように、前近代的集団に入れられる。そしてその存在と機能の衰退が歴史の必然であるかのようにみられがちであった。しかし必ずしも、そのような運命のみをになうものであるかは、検討を要しよう。

## （2）第2次集団 (secondary group)

この概念は、クーリーの第1次集団に対置されて用いられるのが普通であるが、クーリー自身の作ではない。アメリカのヤング (K. Young) あたりの作といわれている。

この集団は、1次的集団が親密な対面的直接的結合関係（いわゆる1次的接触）によって特徴づけられるのとは対照的に、より外的で間接的な、相互に距離をへだてた接触（いわゆる2次的接触）によって結合していることによって特徴づけられる。第1次集団よりいっそう人為的、意識的な性質を持ち、部分的、特殊な利害関心や欲求をみたすために、特定の機能を営む集団のことである。したがってかならずしも面接的な接触によらず、ほとんど間接的なコミュニケーションの手段に依存し、そのうちにふくむメンバーもはるかに大となるのが普通である。特定の利害や欲求の実現をはかる集団であるから、はるかに形式化された組織を持ち、メンバーはその特定の利害や欲求の充足ということとつながっているのであるから、その利害や欲求が不要になれば、その個人は構成メンバーからはずれるのが普通である。したがって現実には必ずしもそうとはいえないだろ



う（現実には1次と2次の集団は分離せず、2次集団に1次的特徴が混入され、混同されることが多い——そこに多くのトラブルや問題の生起の原因がある）が、1次集団とは違って2次集団ではその出入りは比較にならぬほど容易であり、そのメンバーの出入りとは無関係にその集団は存続しつづけるのが特徴である。それ故に非人格的性質を持ち、その機能の達成上はるかに形式化された組織を持ち、一般に制度化される傾向を持っている。その発生上、時には「派生的集団」(derivative group)あるいは「特殊利害関係集団」(special-interested group)とよばれることがあるが、近代社会における典型的な集団である国家、軍隊、政党、会社、学校などの制度的集団はみなこれに属する。すなわち、近代化の過程は、小集団のなかで未分化に果されていた諸機能が、明確に分化され、それをなす集団が制度として次第に整備されていく過程であって、現代生活は第2次集団の第1次集団に対する圧倒的優位によって特徴づけられるとはよくいわれるところである。学齢前の子どものための施設で送る期間が次第にのびてきている現代では、乳幼児と就業していない主婦たちだけが、1次集団の守り手であるともいわれよう。しかしその主婦たちも現在では家庭生活の合理化によってP.T.A.や受験戦争への間接的な参加によって、ますます2次集団との関係を深めつつあることはいうまでもないところである。

### （3） 第3次集団 (tertiary 集団)

第1次と第2次集団とでは、くくりきれないタイプの集団がふえている。これらの分類では、全く一時的な、しかも場合によっては、個人に劣らぬ影響を与える、今日の大衆社会におこる集団現象を説明することができない。このような一時的な集団のことを第3次的 (tertiary) 集団とか周辺の (marginal) 集団とよんで区別するのが便利である。

われわれはたまたまある暑い夏の夕暮れに、巨人・阪神戦のナイターを見るために何処からともなく集まり、隣の人と肩を接しながら坐ることがある。隣の人と話をすることもあれば、一言もしゃべらないうちに試合も終り、何もなかったかのように散っていくことがある。このようななにげない集団でも、いったんことが起れば、たとえば肩を接して坐っていた巨人ファンと阪神ファンがけんかをして、一方が他方を傷つけるというようなことが起れば、少なくともその前後左右に坐っているものは無関心ではおれなくなるだろう。たとえば一人は負傷係に急を知らせることをひきうけて走りだしひとりは応急措置をひきうけ、ひとりは相手の非を宣告したり、説得したりする役をひきうけるかもしれない。とにかくそこで小さな機能社会が一時的に成立するかもしれない。時にはその周囲に一時的な野次馬集団が発生し、メンバー間に特殊な親近感が生れることもあるだろう。そのさいこのような経験をはじめて持った小学校一年生の子どもは、強い印象をうけて、人格を根底からゆさぶられるようなことも起るかもしれない。しかしことが終わってしまえば、さまざまの印象をそこで偶然集団をくんだメンバーに残すかもしれないがメンバーたちは試合終了とともになにごとにもなかったかのようにやがてそれぞれ家路をさして散っていくのである。誰でも今日では、このような経験の幾つかを必ず思いだすことができるだろう。時にはこのような一時的集団でも、メンバーが見ず知らずの人を助けるために命を投げだすようなことも起りうる。しかし事件が終ると、何ごとにもなかったかのような、ありきたりの関係にもどることが、このような集団の特徴である。

このような集団で、特に今日問題になるのは、ある特定の一人対他の不特定多数によってつくられる集団のタイプであるとブラウン (Francis J. Brown) は、その重要性を強調する。このような集団の基礎は特定の1人対他の多勢の中の1人の相互関係からなっているが、大衆が参加していることもある。たとえば、ある映画スターや、歌手や、あるいはニュース解説とそれを取りまく大衆との関係である。このような関係はたいへんうつろいやすいものであるが、その影響はバカにできない。たとえばある少年歌手の死に新聞は、大きなスペースをさいたが、ある立派な大学総長の死には簡単死亡記事だけですましたというように。

#### (ロ) ドイツの集団分類

以上のような米英における集団分類と類似したものに、ドイツのテンニースの集団分類があることはよく知られている。彼は社会結合の本質を意志結合にあるとみ、これを本質意志 (Wesenwille) と選択意志 (Kurwille) とに分け、それによって前者にもとづく結合をゲマインシャフト、後者にもとづく結合をゲゼルシャフトとなすけた、ことは有名である。

##### (1) ゲマインシャフト (Gemeinschaft 共同社会, 協同体)

いわゆる本質意志にもとづく結合であるが、テンニースの本質意志というのは、人間に本来そなわっている意志作用の優勢な有機体的、生得的な意志のことで、活動に内在し、思惟に先行する。これによって結合関係が生れる場合には、信頼にみちた、水いらずの共同生活が営まれ、そのメンバーはひとりひとり離れていても本質的には結合しており、愛しあい、おたがいに記憶を分有している。つまり家族の生活にもっとも典型的にみられるように自他を包括する強い一体感によってともなわれ、「たがいに相手を自己にとってかけがえのない存在として感ずるような」あたたかい感情融和の結合をいう。テンニースはこの関係をあらゆる分離にもかかわらず、結合がたもたれている、持続的で真実の共同生活、といっている。こうした結合の典型としては「血のゲマインシャフトとしての家族」、「場所のそれとしての村落」、「精神のそれとしての町」があげられ、これに対応する主な職業は家内経済、農業、技芸である。こうした意味でゲマインシャフトが主として社会発展の初期の構成物であり、近代社会はそれに代って、つめたいゲゼルシャフト関係の圧倒的比重の増加によって特徴づけられるという彼の社会変動論が出てくるのも当然であろう。

ところで以上は具体的な集団分類の観点からみたのであるが、より抽象的な社会形象の面からこれをとらえることもできる。この観点からすれば風習、宗教などの自然的、伝統的なものがゲマインシャフト的で、政治、世論などはゲゼルシャフト的ということになる。この点からゲマインシャフトには権威のみで、真の支配は存在しない。ゲゼルシャフトこそは真の支配形象としてあらわれるのであって、その典型はナチスにみられる、ともいわれうる。

##### (2) ゲゼルシャフト (Gesellschaft=利益社会, 集合社会)

後天的に習慣化された思考作用によってつつまれている、機制的、派生的意志、つまり選択意志にもとづく結合である。選択意志はたとえば商取引における商人の目論みのように、活動に先行し、それに外在する、思惟そのものの産物で、観念的、人為的統一である。それによる結合は目的に

対する手段として、合理的な思惟を通じてはじめてつくりあげられる。したがって近代の産物である株式会社にみられるように、「あらゆる結合にもかかわらず、本質的には分離している」つめたい人間結合である。相手を自分の利害と目的に対する手段として利用しようとし、互いに緊張し、互いにその活動範囲を限定しあい、「見知らぬ国に行くような気持」で、そのなかに入っていかなければならぬからである。

こうした結合の典型としては、大都市、国家、世界があげられ、主な職業は商業、工業、学問である。

彼の歴史観としては前述のように、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへという図式を想定しているわけであるが、それはゲマインシャフトを身分社会の時代に支配的な結合形態、ゲゼルシャフトを契約社会の時代に優勢な結合形態とみることによって前者の後者に対する発天的先行性を説いていることでもある。しかしそれと同時にそれらが併存的存在としてあらゆる社会を貫通するであろうことも認めている。しかし彼においては構造的にみれば、自然的、本源的なゲマインシャフトがゲゼルシャフトより上位にあることはいうまでもない。

#### （ハ） その他の集団分類

この他にも人間の作る集団の実態とそのあり方を考察するために、参考にしうる集団分類は多々あるであろうが、そのなかでどうしてもあげておきたいものを簡単につけたしておけば、

内集団 (in-group) と外集団 (out-group)

サムナー (W. G. Sumner) は集団の結合と分化に伴って、「われわれ (we)」と「かれら (they)」または「よそのもの (others)」の別が生ずる、つまり内わの集団と外部の集団が生ずることを指摘した。そしてメンバー相互が仲間同志の関係にあるものを内集団、またはわれわれ集団 (we-group)、それに対してよそのもの、外部のものとみなされる集団を外集団、またはかれら集団 (they-group) と名づけた。

内集団が発生するとともに、メンバーたちの間にはサムナーのいわゆる種族（民族）中心主義 (ethnocentrism) の傾向が発生しやすい。すなわち愛着や忠誠の態度でその集団への所属意識を持ち、みずからをそれと同一視するようになるとともに、それとうらはらに外集団に対する猜疑心や軽蔑・敵意を起しがちである。このように内集団、外集団は、個人の主観的同一視を基準とした心理学的な集団概念で、内集団での所属意識が極度に高められると、自己集団の行動様式を絶対視し、外集団のすべてを敵対集団として認識するようになる。たとえば古代ギリシャ人が異国人をすべて野蛮人とみなしたようにである。またナチスや戦前の日本は、この内集団、外集団意識、つまり種族中心主義を人為的にかきたることによって、戦争遂行のエネルギーを培ったのである。したがって逆に理想の人間（民主的な人間）というのは無限のひろがりを持つ内集団だけを持つ、外集団を持たない人として規定することもできよう。

〔公式の集団 (formal group) と非公式集団 (informal group)  
公式組織 (formal organization) と非公式組織 (informal organization)〕

たとえば会社、官庁のようにメンバーの心理学的性質や関係とは独立に、明確な客観的組織と特定の慣習的手続きの体系をもち、それによって行動を規制されているような集団をフォーマルな集団。これに対してたとえば交友集団のようにメンバー相互の心理学的な関係を基礎に、したがってメンバーの黙契や単なる期待に応じて、その行動のしかたが左右されるような集団を、インフォーマルな集団とよぶことがある。

また、同一の集団内部に、フォーマルな組織（体制）とインフォーマル組織（体制）を区別することが便利なることもあろう。公式組織とは、制度化された公式的組織で、目的達成のために意識的に総括されている点が根本的特徴である。これに対して目的達成のために人為的に作られるものではなく、個人的接触や相互作用の総合として自然に形成されるものが、インフォーマルな非公式組織である。

ところで共通目的をうけいれ、協力的態度をつくりあげるために、事前の接触と予備的な相互作用が必要であるから、公式組織に先だってインフォーマル組織が存在することが望ましいと考えられるが、一般には公式組織を契機として人間の接触が始まるのが普通であるところにむつきさがある。

たとえば企業体は完全な公式組織で、明確化された職務の体系がある。つまり企業に属するものが、企業目的を達成するために最も効果的に働けるように意識的に形成されている。しかし、その公式組織は非公式組織と密接にからみあって成立している。そして公式組織が形成され運営されるにつれ、さらにあらたな非公式組織が生まれていく。そして組織が人間の組織である以上、人間的感情をもとにしたこの非公式組織は公式組織の運営上、非常に大きな影響を及ぼす。集団としての団結力は公式組織にくらべてはるかに大きいのが普通であるからなおさらである。

ところで非公式組織は公式組織に対して促進的にも、阻止的にもなりうる。この組織を無視したりしては所期の効果は期待しえない。近代企業は目的達成のためには、非公式組織をのりこえて組織を形成せざるをえないところに、近代的大規模経営の悩みと特色があるといえるのであり、そこで非公式組織の実態をよく把握し、それを積極的に利用しうるかどうかにその成否と発展がかかっているといえる。

## （二） フランスのコントとデュルケーム

以上学生が提起した問題、大学における人間疎外（学生が提起した問題はひとり大学のみにおけるものでは、むろんないが）の問題を考えていくために、参考になると思われる主な集団分類をあげ、そのうちに含まれる人間関係の特質についてみてきた。こうした人間の集団（社会）を分類し、その発生（むろん集団は人間が作る）の歴史的背景と、その歴史的意味及びそのあるべき方向をはじめて明確に示そうとしたのは、衆知のように社会学を創始したフランスのコント A. Comte）である。コントはフランス革命後の政治的混乱を、社会学という形式によって処理しようとした。この意味で社会学はその問題の内容を、フランス革命後の新しい社会的変動の経験によって与えられたということができよう。彼はその学問の課題として、現実の政治的課題の根本的解決という実践

的意図をかくそうとはしなかった。彼はフランス革命後の社会状態を、精神的無政府状態による危機としてとらえ、その原因を社会と個人との矛盾からきているとみた。そしてフランス革命後の19世紀前半のこの危機状態は根本的には、近代初頭からの一つの流れであり、ルネッサンス以後の近代こそは崩壊の運動の季節であり、それ故にこそ近代は破壊の時代としての消極的、否定的意味が与えられるべき時代である。しかしそれはやがて新しい建設の事業による統一收拾季節を内に宿すが故にこそ、価値ある時代とされうるとされている。

コントにとっては、近代が高らかに高唱していた人間的自然、人間的理性に則って旧来の制度を批判、或いは分析することは、旧制度を葬むるための批判であり、破壊でこそ不可欠な意味を持ちうる。しかしその歴史的意味を失って後にもなお不必要に続けられるならば、無用の長物となるか、時代の病弊の原因となる他はないことになる。

ところでコントによれば、旧組織の崩壊は最近のある偶然の原因によるのではなく、文明の発展の必然的結果であることを国王は認めえず、社会の再組織をただ過去の再興、封建的神学的組織の回復に求めている。他方人民の誤謬は批判の過剰、破壊にこそは役だった批判の武器をそのまま建設の道具にも役だてようとしているところにある。批判の無限の遂行がおのずから建設を用意しているかのような錯覚にとらわれている。ところであらゆる組織の存立と、秩序は、その条件を批判にではなく信頼に依拠していることは明らかである。それ故に国王の誤謬は頑迷故に事実と矛盾しているにすぎないが、人民の誤謬は原理と矛盾している。秩序の確立に対する国王の誠実な努力は認めなければならないのであって、別の季節、すなわち再組織の時期にきているのに、破壊の道具たる批判の続行を主張する人民の誤謬と同列におくことはできない。

こうしてコントが混乱せる19世紀前半の社会の再組織を念願すればする程、彼にとっては、中世の有機的統一こそは、強力な再統一のモデルとなる他はない。実証主義哲学により、革命後の社会的危機を、平和的政治組織の再組織によって救済しようと企図し、社会学にその指導原理的地位を与えようとしたコント、彼も初期においてこそ知性の優位にもとづく実証哲学にその基盤をおいていたが、後には感情の優位を説き、人類教を唱導するより他にはなくなった、その秘密もここにあったのであろう。

ともあれ彼が政治的危機の時代を精神的混乱の季節としてとらえ、その根本的解決という実践的意図をその当初から学問的課題としたこと。それが同じ物理学をモデルとし、しかもより早く出発した学問でありながら、その後長い間人間を全体として包みこむものとはならず、技術が極端に重視され、現実の社会のみならず、他の社会科学とのつながりさえもが軽視され続けてきた心理学などとはちがった面を社会学にもたせえた原因であったということはいえるであろうか（社会物理学の代りに社会学という用語を作ったのはコント）。彼にはまとまった教育論はないが、精神的混乱の再組織に政治的混乱の打開の方向を求めるとすれば、当然教育の役割に深い関心を示さないわけにはいかなかった。そして彼の系譜につながるデュルケームによって心理学及至教育心理学の批判として、教育科学及至教育社会学の樹立が企図されたことは、この意味でもただの偶然ではなかったというべきであろう。

閑話休題：コントの所説の19世紀的限界についてはともかく、彼の論じた歴史的社會(集團)の發展について簡単につけ加えておかねばならぬ。彼は周知のように社會學を秩序の理論を構成する社會靜學と、進歩の法則を探求する社會動學によって分けた。前者は社會の形態、組織を論じ、その統一の構成を科學(精神的勢力)と産業(世間的勢力)とにあるとした。彼が重視したのは、社會の歴史的發展を論じ、その根底を人知の發展段階においた、後者の方である。

彼は人間進化的ないし人間の歴史は、3段階、すなわち神學的狀態、形而上學的狀態、それに實証主義的狀態の3段階にそって展開するとみた。これが彼自らが「私が1822年に発見した偉大なる哲學的法則」と称する、いわゆる3段階の法則である。コントの3段階は、上述のような集團分類とは多少趣きを異にするが、今なお参考になる点を多く含んでいるように思われる。

彼が神學の段階というのは、13世紀までの社會の特質で、そこでは僧侶と武士との支配が中心で、いわば武斷的狀態の時代として特徴づけられている。つづく形而上學の段階は14世紀から18世紀までの時代で、哲學者と法律家が支配した法治的狀態によって特徴づけられるべき時代である。そしてフランス革命を経験した19世紀以後の社會こそは、人知による最終段階である實証的段階であって科學者と産業家によって支配される産業的狀態によって特徴づけられるべき社會である、というにある。

人間精神が以上のように神學の段階から出発して形而上學の段階を経て、最後に實証的段階に到達するということは、ある意味では最近のピアジュなどにみられる個體發生の發達理論、幼兒期(自閉性から自己中心的段階)から青年期(社會化の段階)を経ておとなになるという考え方を対応する系統發生的發達理論ともいえる。いわば自己中心的な世界觀から脱却して(脱中心化)客觀的實証的な世界觀の樹立に至る過程と対応させられようであろう。ということは別の言葉でいえば自然に対する、あるいは環境に対する人間の位置が、環境(自然)の中心(自己が世界の中心という考え方)から、あるべき客觀的な位置(自己は無限な世界の有限な一部という考え方)にすえられるということである。それは知的側面からいえば、觀察に対する想像の優位から、想像に対する觀察の優位によってとってかわられるということで、ドグマに対する科學的精神、つまり實証主義の勝利の過程ということである。しかしこの逆転が諸科學の領域すなわち人知において承認されるまでには、もちろん多くのそして長い抵抗があった。しかし今や社會學およびその応用的部門である政治的問題の研究領域を除いてはおおむね克服された。つまり今は數學、天文学、物理学、化学、生物学が順次支配した時代につづいて、社會學の時代に入ったのである。人間の精神は各領域において同一の速度をもって上記の3段階を進んでいくものではなく、対象の單純性と抽象性によって進度は異なる。コントによれば対象の單純性、抽象性を基準として科學は、上記の順序にしたがって歴史的に實証的段階に到達する、というのである。

コントが社會學を創設しようとした時代には、(コントの觀點からすれば)既に前述の諸科學は實証的段階に達していた。しかるにひとり社會學のみがその位置に到達しえていない。現代の不幸の原因はそこにある。つまり國王は神學的政治理論の段階にいまだに固執し、人民また形而上學的政治理論をいたずらにかざすことによって互いに誤謬を重ね、危機はますます強められているのが

現状である。こうして危機からの脱出し再組織する鍵は、社会的政治的問題の研究を実証的段階へ高める（社会学の段階）ことにかかっている、ということになっている。

コントにいささか紙数をさきすぎた観がある。彼の系譜につながるデュルケーム（E. Durkheim）の集団分類については、簡単に付け加えるにとどめざるをえない。

#### （１）機械的連帯の社会

メンバーは、物体における構成要素のように類似性をそなえ、直接に社会に結びつき、有機的に統一されている。したがって個人はなんらの個性を持つこともできず、個性はかえって社会それ自身によって表現されるのみである。

#### （２）有機的連帯の社会

メンバーは相互の差異故に結びつき、それ故に固有の活動と個性とを失うことはない。つまり互いを認めあった分業にもとづく連帯であって、各人は自由な活動を営むことによってかえって意味を持ちうる。というよりは各メンバーが特殊な機能を果たすことによって、果せば果すほど、その集団は全体としての有効な活動を営むことができる関係にある。各メンバーは静止した物体とは異って、たえず新陳代謝をつづける有機体のように、諸器官が各自の特殊性を示しながらも、相より相おぎなって全体としての完全な活動を推進し展開する関係におかれている。

デュルケームにおいては、たえざる分業の発展によって、社会は機械的連帯の社会から有機的連帯の社会へと運動しつづけるものとして、とらえられていることはいうまでもない。

#### （ホ）諸分類の相関性

以上、すでに古典的となっている幾つかの集団分類についてのべてきた。これら幾つかに分類された諸集団は、分類した学者の性格やその国の特色によってそれぞれに独特のニュアンスを具えている。しかしそこで分類された諸集団は、必ずしも相互に独立した、全く種類を異にするが如き集団とはいいがたくむしろ集団分類の重点のおきどころに多少とも特色があるというのが実状である。分類集団相互の間にはむしろさまざまに類似した点、相補的な点の多いことの方が特徴的である。カテゴリー的にみれば、ある分類の一方の集団はもう一つの分類の一方に属し、ある他方の集団は他の分類のもう一つの集団と重複するのをみるのである。

これを要するに、集団分類の契機となった基準は、互いに分ちがたくからみあっており、どの基準を特にとりだすかによって、分類の種類が生じているにすぎないということであろう。たとえば清水幾太郎は、以上のような古典的集団分類において基準としてとりあげられているものには、つぎのようなものがあるとのべている。

##### ① 接触の相違による分類

集団は、メンバー間の接触が直接的であるか、間接的であるかによって分類される。たとえばクレーの分類のように、親密な face to face の第１次集団と、間接的接触による第２次集団（第３次集団）が分類される。前者はメンバーが少く、自然発生的で、成員相互の間には、言語をこえた深い、全人格的な一体感がある。一方後者においては、交通技術の発展を媒介とする、空間的近接

からの脱却克服がみられ、一般にメンバーの数が多く、その接触は間接的、部分的である。

## ② 吸収の割合による分類

集団は、メンバーの人格を吸収する割合によっても分類されうる。たとえばデュケームの機械的連帯社会は、その機械的結合によって人間全体を吸収するのに対し、有機的連帯の社会では、その個性と自由な活動が特色であることにより、その集団が人間から吸収するものはその人間性の一部分にすぎない。1つの集団のうちで人間の諸欲求すべてが充足されているような集団では、逆にその集団は所属するメンバーにそのみかえりとして、すべての人間性のすみずみまでの赤裸々な依存を要求する。逆にある集団のなかで、人間の欲求の一部分のみが充足される時には、その集団のメンバーに対する集団の吸収要求の割合は、それだけの部分にかぎられる他はない。理想的な有機的連帯の社会では個人はさまざまな欲求をそれに応ずるだけの数のさまざまな集団で部分的に果しながら、その合計によってすべてを充足する。これに対して、機械的連帯の社会では、欲求のすべてを未分化な一つの集団において充足しているところに相違があり、集団の側からの吸収の割合は当然そのみかえりとしての形をとるはずであろう。

## ③ 成立の基盤

集団は、その成立の基盤が自然的であるか、人為的であるかによっても分類されうる。自然発生的、人為的といっても、もちろん相対的なもので、集団成立にはいずれも人間の努力を必要とすることはいうまでもない。たとえばその集団分類の基準を本源的意志と選択意志に求めた、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの分類はこれに属するともいえるだろう。一般に自然発生的集団はメンバーの出生に先行し、メンバーが生れてむいしば運命的集団で、これを選んで所属を決定することはできない。したがってまたそこから脱することはできないという意味で、封鎖性の強い集団といえる。一方人為的集団においては、その出入りは個人の意志の側にある。それは自然発生的集団では充たされえない願望、欲求を充足するために、人間の意志と努力によって作られたもので、その所属は運命的ではなく、個人の選択の問題である故に、開放性を具えた集団といえる。

むろんこれ以外にも集団分類の基準となりうるものには、たとえば組織の有無や永続性の如何などをあげることができよう。ともあれこのように考えてくると、これらの集団分類の基準が相補的なもので、前述のようにたがいにからみあって、1つの集団の特色をつくりあげていることが知られる。つまりこれらの集団分類による集団間には、相補的な並行関係のあることが理解されるであろう。すなわち、①の基準による、少数のメンバーの face-to-face な接触によって、なるが故にメンバー全体にとって言語をこえた、いわば表情や成文化されない掟による深い全人格的な了解の成立している集団と、②の基準による、いわばすべての機能をそのなかに包みこむ（したがって未分化）ことによって、人間のすべての欲求がそのなかですべて果され、それ故にまた人間性のすべてを持って依存することを要求する（人間性の全体を吸収する）ような集団と、③の基準による、メンバーの出生に先行し、自然発生的に成立する、運命的な封鎖的集団とは、互いに重なりあい、相補いあって、1つの集団の特徴を作りあげているのであって、別個の集団を意味するものではない。



一方これらに対立する集団としてあげられている①の基準による、交通技術の発展にともない、多数のメンバーの間接的な接触によってなりたつ集団と、②の基準による、分化された少数の機能を果たすことによって、メンバーの部分的欲求を充足するが故に、一面的な関係（部分的吸収）のみで成立する集団と、③の基準による、人間の明確な意志と努力によって形成された、人為的な出入り自由な開放的集団とは、また3つの側面から観察された1つの集団であることが知られるであろう。

こうして種々に分類されてきた集団分類も、つまるところは2つの型の集団を単にちがった側面から分類してきたことになる（前述のなかには3つの集団を分類しているものもみられるが、そのなかの1つは1つの集団から他の集団への過渡的な存在であるか、もしくはいずれか1つの型内の細分化とみてよい。）清水はこの2つの型の集団の特色をまとめて、前者を実体的、未分化、封鎖的、自然的集団、後者を機能的、分化的、開放的、人為的集団として特色づけている。

ところで以上の2つの型の集団は、たとえばコントやデュルケームにみられるように、常に並存関係あるとはいえない。むしろある時代には一方の型の集団が、他の時代には他方の集団がその社会の主流を形成し、その圧倒的支配のもとに社会が形成されるという関係にあるとみるのが適当である。というよりは原理的には社会の進化の過程は、1つの型の集団が支配的に存在する社会から、他の型が支配的となる社会への推移の過程として特徴づけられるべきである。そしてその一方の型から他方の型への逆転の萌芽こそが、中世から近世への過渡期であるルネッサンスの時代に求められるべきことは、衆目の一致するところであろう。つまり中世以前の社会を特徴づける集団は、面と面によるメンバー間の直接的接触による、自然発生的で運命的な全人格を吸収する封鎖的な集団によって特徴づけられる。一方近代社会を特徴づける集団は、そのような封鎖的な集団の機能を分化し、解放する、交通手段を中心とする科学の進展にともなって発展・増加してきた集団である。間接的な接触を中心とする部分的な結びつきによって人為的に部分的な欲求を充足することを目的としているが故に、そのような社会は開放的な諸集団の複雑多岐な有機的結合によって特徴づけられるといえるであろう。

## 5. 2つの型の集団

たとえば、前近代的集団の典型といわれる家族集団においては、メンバー相互の気持が言語や説明をこえて深く了解せられ、全体が密接に依存しあっている。そのために、おうおうにしてその密度の濃さ故に、かえって一種の息苦しさを感じることは、たいていの人の経験の中にあるであろう。それでこそ家出は、たとえチボー家の主人公のような物理的家出にまではいたらなくとも精神的家出は、自我が確立する心理的離乳期たる青年期に誰しもが希求し、くわだてる経験といえるのである。また静止的有限な家族集団と遊戯集団と近隣集団とによって特徴づけられる田舎の生活から離脱し、動的でつめたい近代的機能集団の錯そうする都会への脱出をはかるのは、むしい近代人を特色づけるメルクマルともいえるのである。

しかし一方すべてをクールに、合理的にわりきり、ビジネスライクな有機的關係によって欲求を分化し、自我の快的な発散を計画し終えたかにみえる都会の近代人。それも、複雑な問題を論じた

り、なかでも相互に切迫した要求の調整が必要となる場合には、直接の面談が不可欠であるというように、前近代的社会関係との完全な離脱ができぬところに近代人の限界があるともいえるのではないか。というよりも最も機能分化をとげ、学問的細分化による有機的連帯社会であるはずの大学において、人間疎外の問題が尖鋭化し、人間の問題、人間関係のあり方が問われはじめているのは、むしろ歴史的必然とみるべきなのかもしれない。そして紛争の芽を育てたところが、近代的集団であるべき大学において、前近代的封建的人間関係を最も残存させているかにみえる講座においてであること。それは、学生が冒頭で示唆していたように、2つの集団のコントラストの妙が、人間疎外の問題の解消を求めさせる強い動機づけを与えることになったとみることもできるのではないか。

しかし前近代的集団に対する近代的集団の圧倒的優勢によって現代が特色づけられるといっても、またそれが歴史の必然であるといっても、それだけでは人間疎外の問題は、それによって何の解決にもならない。ある学生がいったように、それが歴史の必然であるならば、苦しくとも、好ましくなくとも、われわれはそれを甘受していかなければならないのであろう。ということはしばらくは、特に都会に住むかぎり、近代的集団において欲求を充足しようとする現代の生活を続けようとするかぎり、人間疎外の問題は、歴史の必然として見過していかねばならないということであらうか。

あるいは、現代にも第1の型の集団、すなわち前近代的集団が存在し、活動しつづけ、しかもある重大な機能を果しつづけていることも事実である。われわれはいわば夜は前近代的集団の典型たる家族集団に依拠し、束の間の渇をいやし、暖を求めることによって、エネルギーの代謝を行う。そして夜があけるとともに欲求と要求の充足にうながされて、現代という近代的集団のジャングルの中におおしくも歩み出ていかなければならないのであろうか。それが現代的ということであらうか。そして近代的集団と前近代的集団の並存のなかで、なお充足しえない欲求充足の機能を果す、さまざまに新しい集団を工夫し、作りあげていくことによって、かいたなき現代的努力を続けていく他はないのだろうか。したがってまた近代集団の果てしない創造と消滅の果てに、かいたなき現代的努力の生活に疲れ果てた後に、現代人は近代的集団のご破算を求めて、定期的に、前近代的集団への一大復帰運動を展開しなければならないのだろうか（たとえばナチスのように）。

#### (イ) 2つの型の集団の合理的組みあわせを阻害しているもの

前近代的集団の圧倒的支配を崩壊させることによって、逆に近代的集団の圧倒的支配を特徴とする現代を生み出したものは、根本的には、商品生産と交換に象徴される資本主義の発生であり、都市の出現であらう。商品生産が一般化せず、したがって交換が社会生活の中心におどり出ない社会にあっては、個人の生活は全体の生活に依拠して生活する以外にはなく、個人が自己自身の意志によって生活を変え、したがってまた欲求充足の方法を個人の責任において調節、工夫することは許されないのみか、考えることすらできなかった。それはタブーである前に生活の原理であった。個人にはその生涯に先だって敷かれていた路線のうえをただたどることのみが許された生活の基調で

あり、それからそれることは望みえないのみか、考える基盤すら社会は用意していなかった。それはいつてみれば馬や牛の時代であり、社会によって生かされ、しかるが故におのずからに社会のために生きなければならなくなっていたのであった。後になって考えてみれば幸福な季節であったかもしれない。その路線にしたがって生きていさえすれば、馬や牛のような安全は保障されていたのだから。だからこそ自覚と流転の時代に入ってから、生活に疲れはてた流転の詩人たちは、自覚なき花鳥の生活にたえず幸福への脱出の夢を描きつづける他はなかったのであろう。

しかし人間は長い前近代的集団への埋没によって象徴される幼時期から脱して、やがて自覚と創意によって象徴される青年期に入る運動を担っていた。さまざまな近代的集団を人為的に創りだすことによって、社会によって支配されるのではなく、逆に社会を支配すべき、世界の主人となる季節を迎えはじめたのである。新しい人間の世紀に入ったのである。

すでにその開始の時期にも、新しい時代の到来にしりごみし、これを歓迎しなかった人も、決して少なくはなかったろう。けれども社会の大勢は新しい時代を歓迎していたというべきだろう。いずれの世にも保守的な老人とシュプランガーの指摘するようにいつまでもおとなになりたがらない、子どもや青年のままでいたいと希求する子どもたちはいたのだが、本来成長と発達とは生物にとって喜びであるはずなのだから。（むろん激動の過渡期においては、変革を歓迎する者と歓迎しない者との比重は変るだろう。青年期には自殺がふえる。日本では自殺曲線は青年期に極端に上昇するが、現代では日本を除く文明国では自殺曲線は、年令とともにゆるやかにふえる坂型か、女子の場合はこれに60才を境に減る単純な山型となっている。——19世紀には文明諸国も日本型であった。——これはきわめて示唆的である。）

近代資本主義社会の発端であるルネッサンスは、一般に農奴制とキリスト教社会で象徴される中世暗黒時代が去って、人々が人間性（個性）を尊重し、現実主義、合理主義つまり人間の知性をもとにして生きようとした時である。そしてその手本を中世以前に輝かしい文化と社会を築いたギリシャ・ローマ時代の再現に求めた運動のことである。中世の静止した領主対農民という関係が、農民上層部の上昇と都市における市民階級の興隆によって領主の支配形態が動揺し、いちはやく資本主義勢力と結んだ王権が、資本主義発展の場を封建社会をつきくずし、中央集権国家を建設することによって地ならしをした時期のことである。そしてむろん、資本主義の成立と発展によって特徴づけられる近代社会と、一部の階級が広範な奴隷制のもとで富と閑暇と教養を誇ったギリシャ・ローマ時代と同列におくことはできない。労働地代から生産物地代へ、さらに貨幣地代への推移によって、農民に対する領主の土地緊縛が弛緩したことによって、その奴隷的身分から徐々に解放された農民にとっては、新しい時代ははじめて味あう自由の美酒を用意するものであった。特に都市は逃亡農奴の避難所としても、封鎖的社会からの脱出の基盤を用意し、今までになく多くの人々をひきつけることによって強大化するに至った。これこそは、資本主義がつくりだした近代的関係、現代社会の意味をよくあらわしていたといえるであろう。

以上のように都市こそは新しい人間関係をのせる近代社会集団を用意し、それによってまた農村における前近代的集団を次第につきくずし、近代的集団の洪水を用意するものであった。むろんそ

ここにおいても近代的集団の恩恵を蒙むる比重は人それぞれにより、またどの階級に属するかによってちがっていた。近代的集団の1つの特質が人為的であるにしても、この特権を生かす個人、階級はごくかぎられていた。したがってまた、機能分化による欲求充足の可能性もまたそれによってたいへん相違し、所属集団が要求する吸収の度合いにおいても、はなはだ懸隔のあることが次第に明らかとなってきた。その最も顕著な表現が、労使の対立関係であろう。しかし労働組合が人間的欲求充足追求のための集団として強大化してきたのは、比較的現代に属する。しかもこの過程で次第に明らかになってきたことは、労使関係を中核としながらも、それに加えて男性集団と女性集団（性による）、それに幼児集団と学童集団と青年集団と成人集団（発達による）などのいわば運命的な集団所属がいまだに、人間的欲求充足のための権利行使（つまり人間的自由）の決定的要因となっているということであろう。これがお互いを人間として扱えない——つまり人間として扱う前に働く社会的規制の——原因となっているということであろう。

誰と誰の男の子であり、女の子であるかを、われわれは選んで生れてくることはできない。また人間は人間の発達の過程をはしおって、すぐさまおとなであることはできない。これは人間の限界であろう。しかし出生後の集団所属は運命的なものではない。人為によって操作しうるものであるのみならず、操作することこそ現代人の権利であり、生き甲斐ともいえる特質である。そのことを心ゆくまで知った現代人が、所属する階級（階級的対立の統一的単位としての国家も含めて）と所属する性集団と所属する発達の集団によって、その権利の行使が制限されているのをそのままにしているというのは、現代におけるもっとも大きなアナクロニズムではないか。

閑話休題!!

#### （ロ） 大衆社会の集団的特質

現代は、大衆社会によってそれ以前の社会に対して特徴づけられることが多くなっている。現代大衆社会があらわれる以前にも、特にそのすぐ前の市民社会では、すでに大衆がはっきりその存在を明らかにしていた。特にフランス革命においては、そうであり、産業市民層や農業資本家によって代表されるブルジョアジー、市民層が、プロレタリアートのにわかな台頭によって、資本主義の危機を意識した時が特にそうであった。封建的身分の隷属関係の一切の拒否をいさましく宣言し、法の前では何人も平等で、自由対等な関係にあることを理想とした市民社会。その一方では国家の役割を干渉の可能なかぎりの排除と政治的中立による夜警国家の役割にとどめようとしたブルジョアジーが、自由と平等の名による夜警国家の必要性を痛感したのも、そのころであつたろう。彼らにとっては暴徒の出現であり、彼らは合理的反省を持たぬ感情的集団、したがってまた犯罪への危険を具有する大衆、つまり群集出現の危機をそのなかにいちやくよみとったのであった。

現代大衆社会の出現は、近代社会のエリートである市民階級が、大革命及びその後の19世紀の動乱のなかにかもしだされた危機意識のなかから、いち早く読みとった方向であった。これが20世紀に入ると、既にこの大衆の政治的参加を背景に、エリートのそれに対する逆操作の弊害と危険（ナチス、共産国家の出現）が、危機意識として常に識者の主要な社会的関心となってきた。このよ

うに大衆社会の出現は、常に危機意識とともにとらえられ、それとともに進展してきたところに、大きな特質があるといえるかもしれない。

いずれにしても現代は大衆社会によって特徴づけられるというべきだろう。したがってその発生の原初形態（とブルジョアジーはみた）としての群集（及び群心理）とその理想的形態としての公衆についてみておく必要がある。大衆（mass）、群衆（crowd）、公衆（public）は、いずれも組織されていない、非組織的集団であって、正確には社会集団とはいえないといわれている。しかしひろい意味で社会を構成している集団としてとらえる必要がある。

群 集（crowd）と公衆（public）

ル・ボン（G. Le Bon）は、来たるべき社会を「群集の時代」となづけたのに対してタルド（J. G. Tarde）は、これを「公衆の時代」となづけた。これはル・ボンが現代の人間の特質を非合理的な、覚醒催眠の状態にあるものとしてとらえたのに対して、タルドが合理的な、独立した思考能力を持つ人間とみたところからきており、一方は現実を一方は理想を人間のなかにみたともいえよう。というよりも、人間は両方をもった存在であり、その一面を見たということもできるし、また新しい大衆社会をになう大衆は、出現の当初、発達の早期においては群集的特質を特色とせざるを得ないが、次第に理想的形態である公衆的特質を具えていくとみるべきではないか。それぞれについてその特質をみておこう。

群集には、種類が区別されている。

- ① 突発的群集——事故現場にみられるように、ある場所で、一時的に、ある突発的対象にむかって成立する群集。
- ② 偶然的群集——たとえば選挙の応援演説に集まるように、偶然そこにいあわせた人々が、あらかじめある目標によってつくりだす群集。
- ③ 定期的群集——たとえば定期演奏会などに集まる聴衆のようなもの。

その特質としては、

- ① メンバーが空間的または物理的に近接していること、
- ② メンバー間に、注意の共通の方向、関心の共通の対象があること、
- ③ 集合状態が一時的であること、
- ④ 成立に偶然性が支配的であること、
- ⑤ 匿名性を持つこと、
- ⑥ 以上のことからいわれる群集心理がメンバー間にしみわたること。

以上のような群集心理が支配的になる時には、個人は日常の個人とは違った異質の行動をする点に特質がある。群集のなかでは、個人はほとんど思惟能力を失って、原始的衝動による未分化な全体的情動的反応を示し、したがって暗示をおそろしく受けやすくなる。これに加えて匿名性という仮面にかくれ、多勢という意識にささえられて無責任な衝動的行動にかりたてられることがある。ル・ボンは、近代的人間も一度群集という集団のメンバーになると、文明人ではなくなり、無意識の底にひそんでいる原始的なものの、本質的なもの、自然的なものがかきたてられ表面化されて野蛮人

になる。つまり、20世紀は、多数者の盲目的な力こそが唯一の歴史哲学である。国王の神権が群集の神権にとってかわられる時代だとみたのである。ルボン<sup>1</sup>は、群集とは隔離しているエリートとしての立場からとらえたが、エリートも群集の一員となることを忘れていた、ともいえよう。

公衆は群衆に対してタルドがたてた概念で、その特質をあげれば、

① 群集のように物理的、空間的に一定の場に一時的に凝集することなく、空間的にも散在しながら、時間的にもかなり長い間にわたって、分散しながら存在している。

② しかし孤立しているのではなく、散在しながらマスメディアによるコミュニケーションを媒介として、精神的に交渉しあっているメンバーを含み、むしろ強い連帯性が保たれている。

③ したがって群集のように対象に対して一時的ではないにしろ、共通の関心や興味によってつながっているが、一つの対象に一時的全体的に没入することではなく、自己を合理的にコントロールする自己意識と自由を常に保持している。

④ 共通の関心の対象となるような事件が起れば、これを中心として広く社会のうちに一つの公衆が成立する。公衆は時々刻々に変化する状況の知識と資料と情報とを豊富にする。そしてそれをもとにして、合理的かつ自由な思考をすることによって、とるべき方法の作製と実現に向けて行動する。

こうして出てくる意見と運動とが世論とよばれるものであろう。民主主義社会の政治は、この世論を反映する形で行われるものであるから、公衆こそは民主主義の不可欠の柱であるともいえる。

しかしそれには、

① コミュニケーションのメディアが権力から独立して、中立であること。その利用が万人に自由かつ平等に開放されていること、

② 討論しうる能力が保証されていること、が条件であらう。

しかしタルドがかかる構想を描きえた時代には、選挙権を与えられてその政治的意見を反映できるものは、いわゆる中間層以上の同質性をもった小集団つまり中産階級以上を基盤としていた公衆であった。だからこそ、新しく歴史の舞台に登場してきた非公衆的群衆は、ル・ボンやシゲール(S. Sighele)にとっては、少数の知的貴族に対立する無思慮な集団であり、歓迎されえない犯罪的暴徒として映らざるをえなかったのである。

今世紀に入ると、いわゆる大衆化現象による選挙権の相つぐ拡大と普通義務教育の浸透によって、世論形成の主体は、公衆と群集とをあわせ含む大衆へと拡大されたとみることができる。こうして資本の独占化がいよいよ進展する現代では、大衆社会に占める群集の存在は量質ともにいよいよ無視しえぬことになろう。その過程でもっともたいせつなことは、国家権力の見えざるマス・メディアの操作であらう。すでに資本主義の発展段階を反映して、その見えざるマスメディアの操作によってつくりだされていく「孤独な群集」の存在こそが、人間疎外の問題として一つの危機現象としてわが国でも意識されはじめているといえるのではないか。

この点から、与えられた自由の重荷にれえかねた中産階級が、その権威主義的性格から支持したことが、その成立の基盤を与えることになったナチズム。そのナチズムによってアメリカに亡命せ

ざるをえなかった、新フロイト派のフロム (E. Fromm) の大衆疎外操作についての警告は、昭和元禄に酔うわが国にとっての恰好の警告となっているといえるであろう。

（ハ）フロムの警告

フロムは、その著書「自由からの逃走」（日高六郎訳・東京創元新社）の序文のなかで次のようにのべている。「現代の政治的發展が、近代文化のもっとも偉大な業績——個性と人格の独自性——にとって危険なものとなっているのをみて、……現代の文化的社会的危機にたいして決定的な意味をもつ一つの側面、すなわち近代人にとっての自由の意味ということに集中しようと決心した。」そしてその冒頭で「自由の問題が、心理学的問題であるか？」と問い、むしろ心理学者の責務がその背景となる近代人の性格構造の分析の方にあることを認めながらも、心理学者は「必要な完全性を犠牲にしても、現代の危機を理解するうえに役立つようなことがらを、すぐさま提供しなければならない」と思うといっている。

フロムのこのことばは、話を好んで今さらこみいらせる必要もないが、学者にとっては古くて今なお新しい永遠の問題を含んでいるともいえよう。

デュルケームが科学としての条件として、

1. 研究の観察に与えられた後天的現実的な諸事実を対象としたものでなければならない。
2. これらの事実、同一の範疇内に分類されるために十分な同質性を、相互の間に示していなければならない。それらの諸事実が相互に還元されないものであれば、それには一つの科学ではなく、それだけ多くの科学があることになる。
3. これらの事実の研究が、知識のためという没価値的な態度によって研究されるということである。

以上3つの条件をあげた時、思弁的思考に対する、近代科学の公共性の伝統が発生したとすれば、学者にとっては容易なことではあるまい。

一つの科学ではなく、多くの科学がそれぞれ別個の領域で成立しており、ますます多くの領域が分化し、その独立性を主張するところに、近代科学の進歩の方向が示される以外にはないようにもみえるからである。

また何かさし止めた要求や目的から、つき放すことによって、知識それ自身のために求められるという態度こそ、近代科学の出発点だったかのように見えるからである。（学問の成果を利用するのは政治家であろう。つまり政治家のブレンであることは、学者でないことの宣言であろう。）

これこそは近代科学が伝統としてきたものである。長い科学以前人類史にくらべれば、未だ伝統というにはふさわしくないほどに短い学者の世界の慣習、慣行にすぎないかもしれない。しかしこの足枷は、現代の学者にとっては重かる。だからこそフロムは、序文やその第一章をさいて、遠慮がちに自由の問題が心理学者の問題であるかどうかと問いかけている。

しかしフロムは、現代社会では、人間がそれに向って努力してきた「自由」に関する獲得が、非人間的諸条件と社会的矛盾の増大によって最大の危機に直面している。今、心理学はその危機の理

解のために役だつものをすぐさま提供する義務があるといっている。フロムならずとも、科学は1つであり、1つの全体であることをとりもどすこと（科学が学問のための学問に退いた（1歩後退）のは、次の2歩前進のためであるにちがいない）によって、はじめて科学はその人間性（人間の科学）を獲得できると考えるだろう。なぜならば全体的危機の表現としての現代において、その有効性を発揮しなければ、学問自体もご破算となることは明らかである、（現代は戦勝国の学問は生き残り、戦敗国の学問はご破算になる、といった今までのような容易なものではない）・・・全般的な危機の時代に、われわれは生きているのだから。

フロムには、それ以外にもなお書かねばならぬ理由がある。彼にはナチスに追われた経験があった。しかもそのナチスを成立させたのは、彼もおそらくはその一員であった、ドイツ中産階級に他ならなかった。そして19世紀にその出現が意識されはじめた群衆（大衆）を、彼をも含めた少数の知的貴族に対する、無思慮な集団、むしろ犯罪的暴徒の群としてしか、とらえられなかったル・ボンやシゲールらの社会学者。彼らはともかく、前述の他ならぬ近代的学問の創設を企てたデュルケームや、そのデュルケームとの学問的類似が国際的に話題となってきたクリーク（E. Kriek）などの社会学者の考え方の方向が、かえってナチスに利用されることにならなければならなかった、その過程は、彼フロムの目で行われ、犯された歴史的誤謬であったのだから。デュルケームの誤りはくりかえしてはならないのである。

#### 閑話←休憩

フロムという。近代史は、いや人間の歴史は自由への戦争であった。政治的、経済的、精神的、いや自然的、肉体的をも含めたすべての枷からの自由を獲得するための努力の集約だったともいえる。もちろん自由を求めるこの闘いは、自由を持たぬもの、自由を抑圧され、制限されているものによって闘われた。特権を持っているものに対する自由獲得の闘いが、闘いとられるやいなや、抑圧に抗して闘った階級は多くの場合その闘いの過程で獲得した特権を守る、自由の敵への転化の芽を宿しつつ、自由へのこの闘いは果てしなくくりかえされ続けられてきた。この自由獲得への闘いの人間の歴史は、人間の完全な自由が獲得されるまで続くかのように、人間の努力の中心を占めてきた。自由こそは生きる目標であった。だからこそ多くの人々は、この闘争のために死んでいった。抑圧に抗する闘争のために死ぬことは、自由なしに生きるよりもまだましだと信じながら。

こうしていくたびか逆転しながらも、自由は動反動の弁証法的発展のなかに勝利の歴史を積み重ねてきた。ドグマからの自由、経済的自由主義、政治的デモクラシー、宗教的自律、生活における個人主義など、など。抑圧の綱はつぎつぎに断たれ、自由の敵は、次第に歴史の彼方に葬られていった。こうして外的な支配を廃止することによって、人間は自分自身を支配し、自分で決断し、彼がよしとするままに考え、感じることができる、つまり個人が世界の主人となるという、自由の宿願が達成されつつあるかにみえた。

多くのヨーロッパ人は、第一次大戦は最後の闘いであり、その勝利は自由のための最終の務利を約束するはずであると信じた。しかし大戦後僅か数年のうちに、人間が長い歴史の末に実現しえた一切のものを破算にし、自由のとりでであるかのように信じていたものをあざわらい否定するこ



とのなかに成立する新しい組織が、あちこちで人気を拍するようになった（ドイツのナチス、イタリヤのファシズム、スペインのフランコ政権、及び東洋の日本など）。これらの国々では獲得したはずの自由を、おしげもなくすてたのである。しかも自分で支配することのできない権威に服従することによって自らが棄てさったのであった。しかもそればかりではなく、さまざまな形で、国の内外をとわずに自由を保証するとりでであるはずのデモクラシーをつきくずし、個人の自由を圧殺する闘争を自らが展開していくことになった。もちろんこの過程では、それらの当事国においても、さまざまなレジスタンスの行動が起され、遂行されつづけたことは衆知のこと、これはわれわれにとって、今なお唯一の救いとなっている。しかしそれでこそ逆にいえば余計に、このレジスタンスを越えて展開された自由圧殺のための闘争のエネルギーのすさまじさは、われわれを驚かせ、われわれにとっての脅威であったといえる。そしてそれは一時の悪夢にしかすぎなかったのか。

しかし、われわれにとってショックであったことは、これらの国々では、その先祖が自由のために闘ったのと同じほどの熱心さ熱狂で、少なからざる人々が自由を棄てて、自由獲得の代りに、自由から逃れる道を探さねばならなかったこと。そして残余の多くのものが、血で父祖があがなはずの尊い自由を、そのために死ぬほどの価値あるものとは思えなかったこと、つまり自由喪失を眼前にしながらむしろ無関心でありえたことであった。彼らはなぜ自由から逃走して、権威への服従の方をむしろ欲したのか？ なぜ彼らは自分の目前でくりひろげられた自由剝奪劇に全く無関心でありえたのか？

フロムはここに一般化した今世紀の世界的危機の現象の芽を見出している。そして特に以上のことが第一次大戦に敗れた国を中心に展開されたことを思えば、第二次大戦に敗れたわれわれにとっては、余計に無関心ではありえないだろうことを、警告しておくことは無意味ではないだろう。

（もっとも、ファシズムは資本主義に遅れをとったがために自由を制限されねばならなかった被害者の自由獲得のための、人類最後の闘争のために必須なものと主張されたことは衆知のこと。そして戦前の大東亜共栄圏の思想も、戦後の大東亜戦争肯定論も、国民総生産（G. N. P.）向上第一義論（エコノミック・アニマル的遂行）も、いずれもある次元の自由獲得論で貫かれている、ことには変りはない）。

ところでフロムは、精神分析学者であり、ニューフロイディズムの系列につらなっている。その学問上の師、フロイトもまたナチスによって故国ウィーンをおわれて、その晩年を異国、ロンドンの空の下で送らなければならなかった。フロイトは、自由獲得の歴史の背景をになってきた近代合理主義が見落してきた、非合理的な無意識的な部分に観察と分析のメスをはじめて加えた。そしてそのことによってニーチェやマルクスとともに、自由の敵がかえって文明社会に存することを警告することのできた数少ない人々の1人となった。特にフロイトは、近代病ノイローゼに眼を向けることによって自由の敵が外側にだけでなく、人間の内側にも存することを警告した、最初の1人となった。

「しかし」とフロムはいう。「フロイトは彼の属していた文化の精神によって、非常にゆがめられていたために、その限界からさらに進むことはできなかった。」「たしかに（フロイトのいうよう

に) 人間が誰しも持っている、飢えとか渇きとか性とかいう欲求は存在する。しかし人間の性格に個人差をつくる、愛と憎しみ、権力に対する欲望と服従への憧れ、官能的な喜びの享楽とその恐怖といった種類の衝動は(フロイトとは異って)、すべて社会過程の産物である。人間のもっとも美しい傾向は、もっともみにくい傾向と同じように、固定した生物学的な人間性的一部分ではなく、人間を造りだす社会過程の産物である。」こうしてフロムは、フロイトが築いた動的な心理学の伝統によりながら、非社会的、非歴史的な生物学主義的リビドーの、いわば社会学的修正をくだでてる。

そしてフロムはいう。社会心理学は、まず「適応」という概念を検討することが必要で、そのためには「静的」な適応と「動的」な適応を区別することが有益であろう、と。静的な適応は、たとえばしとちわんの日本式の食事の仕方から、フォークやナイフを使う西欧的な仕方に変えるような種類のものである。こうした適応行動は新しい衝動や習性を生みださないから、彼のパーソナリティにはほとんど影響を与えることはない(果してそうか?)

重要なのは、むしろ動的な適応の方で、これはたとえば子どもが厳格でおそろしい父親のいいつけにしたがって——おそろしさのあまりに——「よい子」になるような場合である。子どもは静的適応と同じく環境の必要に適応するにはちがいないが、彼のうちには何かが起るという点で、前者とは大きなちがいがある。彼は父親に強い敵意を抱くだろうが、それを意識するだけでも危険なので抑圧する。しかしこの抑圧された敵意は表面化されないが、消えてなくなるのではない。新しい不安を生みだし、ひいては根深い服従へと導いていくかもしれない。それは逆にいえば反面特定の誰というのではない、ばくぜんとした人生一般に対する反抗心といったものを育てる。この不安と衝動が性格構造における動的な要素である。したがってフロムにおいては神経症はフロイドのいうように生物学的なエディプスコンプレックスに基因するのではなく、むしろ非合理的な外的条件、成長発達にとって好ましくない外的条件への動的適応ということになる。そして動的適応はこうした個人的側面からばかりではなく、たとえば社会集団における破壊的なサディズム的、また逆のマゾヒズム的な集団衝動のようなものも、やはり非合理的で人間の世界にとって有害な社会条件に対する適応としてとらえられる。

こうしてフロムは個人的欲求と社会過程との動的な相互作用に注目し、メンバー間に共通に形成されていく中核的性格を、「社会的性格」と名づける。(個人を観察してえられた発見が、はたして集団の心理学的理解に適用できるか?——フロムはこれに対しては次のように答えている。どのような集団も個人によってできたものであり、しかも個人以外のものによってできているものではない。それゆえ、集団のなかで働いているメカニズムも、個人のなかで働いているメカニズムにほかならない、といっている。)そして自由から逃走し、権威への服従を求めてナチスを支持していかなければならなかった、ドイツ中産階級のメンバー間に形成された社会的性格は何か。フロムはこれを権威主義的性格や、現代資本主義社会に特徴的な疎外された市場的性格などによって特徴づけている。

紙数の関係で、フロムの考えをいまは簡単にみておく以外にはないが、正常あるいは健康とか、

異常あるいは神経症的という言葉は、二様に定義される他はない。もしある社会の構造が、個人の幸福にたいして、最上の可能性を与えることができるようなものであれば、2つは一致できるが、われわれの社会では未だかつてそのようなことは起らなかった。社会の円滑な機能の遂行と、個人の完全な発達という目標とのあいだには、分裂が生じ、それ故に健康あるいは神経症的という概念の間に鋭い割れ目が生ずる。こうしてよく適応しているという意味で正常（健康）な人間は、人間の価値については、かえって神経症的な人間よりもいっそう不健康であるばあいがしばしばあろう。彼がよく適応しているようにみえるのは、社会によって期待されているような人間になろうとしてその代償として自己をすて、自己を抑圧しているからである。逆に神経症的な人間の発生は、自己の自由な欲求の発散のために、けっして社会の異常な目標に屈服し、これを棄てるようなことのない結果である場合がわれわれの社会では特に、しばしば起ろう。すなわち人間的価値の観点からすれば、世間の評価とは逆なのである。それはただ社会的効率というみかたから評価されてきたからである。逆にいえばそのメンバーが人格的成長においてかたわにされている（つまり多くの人がよき適応者でない場合の）ような社会が、かえって正常で健康的だということもしばしば起る。

個人が安定感を与えられるのは、人間の幸福と自己実現が一致する時で、この第一次的絆がたちきられる、すなわち個人が、彼のそとに完全に分離した全体として（つまり個人を疎外した関係で）成立している世界と直面するやいなや、彼は大衆のなかにいながらかえってたえがたい無力感と孤独感とにおそわれはじめるのである。この無力感と孤独感（人間の人間らしい意識を失う、つまり人間からの疎外感）にうちかち、不安を解消する道には、2つある。1つは、その不安にたえ彼が「積極的自由」の道へ進むことであり、もう1つは、疎外した現代の社会から過去へ逃避（退行）し、現代までに実現されてきた人間的自由を棄て去る道である。前者の道こそが、愛情と仕事において、彼の感情的感覚的および知的能力の純粋な表現において、自発的に彼自身を世界と結びつける。すなわち独立と個人的自我の統一を棄てることなしに、人間と自然と彼自身とが1つになることができる。しかしそれには無力感と孤独感が由来する現代の疎外された社会に堪え、個人を自然的社会的埋没から解放（つまり逆にいえば疎外）し、人間的自由を実現してきた世界との関係を、再び統一的な関係にとり戻すための自己との闘いが大衆的に展開される必要がある。

後者は、個人的自我と世界との間に生じた分裂故の孤独感に堪えかねて、その消滅を過去への逆戻りという形で急ぎ解消しようとするもので、到底現代を少しでも生きた人間の幸福な解決法とはいえない。なぜならば個性と自己の統一性のまちがった社会への完全な屈服という人間性の否定を含んでいるから。だからこの道はもしそれが必要以上に長びけば、生きていくこともできないような、一時的逃避の道、すなわち神経症的解決法にすぎないのである。一時的に集団で病気になることによって、たえがたい不安をやわらげ、恐怖から逃避しているにすぎないのであって、幸福とは逆の方向に向った解決である。

このような社会的逃避のメカニズムのなかで、主なものとして、フロムがあげているものにはつぎの3つがある。

#### ① 権威主義

② 破壊性

③ 機械的画一性

フロムは、こうした逃避の機制の危険さを、いやという程、ナチスの拡大化のなかで目撃してきたわけである。そしてこうした現代社会の危険からの真の救済の道が、人間が人間を疎外する歴史的過程を直視し、それに積極的に立ちむかう姿勢の彼方にのみ約束されうることを、彼程身にしみを感じている人はいないかもしれない。紙数の関係でその分析はつぎにゆずりたい。

## On the Alienation in the University

—Mainly on the basis of the students' report—

Hiromu, Kishimoto

There seems to be some estrangement in the human relations between teachers and students in the university. Many of the students are dissatisfied with their teachers. My lectures on "adolescent psychology" and "educational psychology" have several times become targets for their criticism. I think their dissatisfaction is often based on their misunderstandings, but I cannot also deny the fact that there remains much room for improvement on the teachers' side.

Some time ago I assigned a task to my students to inquire into their college-mates on free themes. On that occasion the themes that many of them chose were those concerning the alienation in the college and the outer world. This paper is a sketch of studies and discussions made among them on the basis of their reports concerning the said themes.